回　顧　十　年

天文同好會副會長
倉敷天文台主事　水　野　千　里

1. 前　言　私が「月世界旅行」といふ天文小說を讀んだのは，今から四十餘年前のことである．中學生時代に「初等教育小天文學」「普通天文學」「地球の過去及び未來」「地球と彗星との衝突」等を讀んで，星に憧れ始めた．それから「星學」「天界の現象」「天文學大意」を手にし「高等天文學」は難解で今に讀み下せない．一戸博士の著書數部に手をつけ，明治四十年九月に「星座早見」が出版されたので，これと天と首引きで，星座を覺え，新撰恒星圖で星の名を記憶する樣にした．明治四十三年ハレー彗星が七十餘年振りで，現はれたので大に天文熱を高め，日本天文學會に入會した．當時は「天文月報」第三卷が發刊されつゝあつたので，第一卷，第二卷を購入し，引續き今日迄讀んで，年々製本して，書齊に「天界」と相俟つて光彩を添へて居る．

2. 天文同好會創立頃の思ひ出で．大正九年七月頃であつたと思ふが，大阪毎日新聞紙上で，天文同好會が近々創立され，機關雜誌が發刊されるといふ記事をた見ので，早速會員にならんとて申込んだところ，何の音沙汰もないので，自然と忘れて居たところ，一日古川龍城といふ人から手紙が來た．古川とは知らない人だが，宛名が水野千里としてあるから開封した．

ところが，それが天文同好會創立の趣意書であつた．發起人は山本一清博士，古川龍城外數氏である．

九月に京都大學で創立總會が開かれる就いて，御案內を受け誠に恐縮し

たものである.

十一月になつて，山本博士から岡山地方で，天文講演會を催したいから斡旋してくれといふ，御手紙を受取つたので，早速奔走した結果，二十一日から岡山市内六高，岡中，吉備商，市立商業等で，講演會を開くことになつた．此處に一つ困つたことが起つた．それは岡山驛に山本博士を出迎へても，相互に顏を知らないといふことである．一思案の上，國旗に「天」の字を書いて振ることにした.時刻になるとプラットホームに出て，旗をかざしてあちらこちらと探して居ると，「貴方が水野さんであるか」と，一紳士によび止められたので，山本先生でありますかといふと，さうてすと……時間に餘裕があつたのと，先生は岡山へ初めてゐらつしやつたのであるから，天下の名園後樂園へ御案内致し，茶店に憩ひ鶴見團子を食べながら物語つて居ると，先生はトランクから「天界第一號」を出して示されたので，拜見した．盲は蛇に恐れずとか，私が投書した「天文と旅行」が第九，十頁に載せられて居たのを見て胸を躍らせた．會員名簿を見ると岡山縣の部には二名しかなかつた，私と今一人は石井峰男といふ廣島縣人であつた．それから宅へ御案内したが，五女が生れて十日ぶりであつたので，御宿をすることが出來ず，近所の高等下宿へ泊つて頂くことにし，三日間の講演會は日々盛會で，十餘名の會員を新に得たことは幸先よしと，先生と共に大に喜んだのである．それから年内に會員が四十二名に達したことは，意想外であつた.

3. 支部第一號　山本先生が歸洛されると間もなしに，十一月二十四日附で岡山支部が置かれ，私は支部幹事を囑託され今日に及んで居る．支部としては，第一に會員を募集することであるので，會ふ人毎を勸誘して，大正十年末迄に通計一百五十八名を得て，天文の方面に共鳴者多きに驚いたのである．大正十年一月六高教授理學士宮原節氏が，幹事を囑託せられたので，大に力を得て，毎月第二の土曜日に「天界研究會」を開くことにして，昭和二年宮原教授が海外研究員として渡英される迄これを續け，支部の發展，天文の研究に相當の成績を擧げたものである.

大正十年一月十五日岡山縣社會課主催で「時の展覽會」が催されたので，

京大から諸種の出品物あり，支部からも天文に關するものを出品した．十日には，支部發會式を行ひ，新城博士は「時について」山本博士は「太陽系の未知星」と題し講演され，十六日には，山本博士は「星座の話」，私は「天球について」講演した．

年々數回支部例會を催し，天文講演　天體觀測を行ひ，岡山支部通信は數年間「天界」雜報欄を賑はしたものである．

評議員が本部に置かれたときに，宮原幹事と私とは何れもその一人となつた．又私は多數の會員を募集した廉を以て，會則によつて名譽會員に推薦された．私の十年間に取扱つた新入會者は二百六十七名である．

4.　天文臺第一號．天文同好會が，地方に民衆的天文臺を設置せんと計畫したのは，創立當時からである．大正十年一月に新城，山本兩博士を迎へた時に，岡山支部に對して，山本博士は岡山附近は氣象狀況が，天文臺の位置として頗る適切であるから，大に設置運動をする樣にと奬められ，天界紙上に於ても「岡山天文臺」を標語として，大に宣傳に努められたものである．私は新聞に，雜誌に，著書に，講演にその必要を述べたものであるが，それに報いられて，大正十五年十一月二十一日倉敷天文臺創立記念式を擧行することを得た．これは倉敷市素封家原澄治氏の出資によるものである．開所以來毎月第一，第三の土曜日を公開日とし，天文講演及び天體觀測を行ひ，其の他の日と雖ども，隨時參觀を許して居る．大正十五年以來昭和五年八月迄，公開講演會を開くこと六十五回．毎月一回は連續講演とし，水野主事これに當り，第一次毎月の天（曆にある星座）第二次太陽系第三次，星座の話（曆にない星座）第一，二次を終り，目下第三次連續講演中である．毎月一回は天文に關する時事問題を主とし，これが講師となつた人々は，山本博士，宮原理學士，中村要氏，奥田毅氏，小槇孝二郎氏私等である．倉敷天文臺の幹部は御承知の通り，臺長は山本博士，名譽臺長原澄治氏，臺員宮原理學士，中村要氏，主事は私である．其の外中藤益之介氏，小川龍五郎氏が種々御世話して下さつて居る．殊に小川氏は平日天文臺の案内役として活動されて，春秋の好時節には毎月一千人以上の參觀人に滿足を與へ，年々數千人を喜ばせて居られる篤志家である．年々十

一月には創立記念日の前後に記念式を擧行し，天文講演，展覽會，活動寫眞等を催し天文普及の爲めに努力して居るのである．又本年から八月に天文學講習會を開催することに定め，八月十七日から四日間その第一回が實施され，山本博士は「實際天文學」，水野主事は「大熊星座と小熊星座」について講演したのである．

三十二糎の反射望遠鏡で，天體撮影が開始され，佐々木元一，奥田毅，小川龍五郎の諸氏が之れに當り，倉敷天文臺繪葉書第一輯が出版された．今迄は研究方面に使用されて居なかつたが，今後荒木健兒氏が變光星觀測の方面に活動されることになつた．

5. 山本博士と私　山本博士を岡山に御迎へした最初は大正九年十一月であつたが，時の記念日に二回，岡山支部主催講習會四回，倉敷天文臺へは年々御迎へして居る．博士なり，博士御夫婦の御宿をしたこともある．京都に行けば大抵博士の御宅に泊り，御長男進さん，御二男修さんとは大の仲よしである．又大正十三年四月には，滋賀縣桐生に先生の御留守宅を訪問した．博士が東奔西走して，天文學の普及に努めて居らるゝことはいふ迄もなく，岡山驛を通過せらるゝ毎に電報を頂き，驛に數分間會ふたこと數限りなく，他人とは思へず全く親類になつて仕舞つた樣である．私は來翰を親族，軍人，知人，天文同好會員等に別つて整理して居るが，山本博士丈けの分を作つて居る程手紙の往復が頻繁である．

6. 私の投稿した新聞，雜誌並に著書　新聞の方は岡山では山陽新報，中國民報，岡山新聞，大阪の朝日新聞，旅行中には臺中新聞，臺北日々新聞，小樽新聞等で，雜誌の方は天界＝第一卷四回，第二卷四回，第三卷二回，第五卷五回，第六卷三回，第七卷三回，第九卷二回，第十卷二回，(主要なるもの丈け)．地理教材研究二回，ミカド評論數十回，ミカド六回，其の他．著書には大正十一年「星の話解說」大正十二年「太陽の親類めぐり」「星座めぐり」あり，何れも大正十二年關東大地震，大火災の爲め紙型を燒き絶版，「星に憧れて」「星の博覽會」は脫稿．現今執筆中のもの「星座かるた」これは殆んど出來上り，「星座要覽」には主力を注いで居るもの，「教材としての天文學」これは小學校の讀本，地理書，理科書にある天文學の教材を解說

したもので，家庭及び小學校教員諸氏の參考の爲めに筆を進めて居るのである．

7. 結　言　私の過去十ヶ年に於ける天文に對する奮鬪振りを聊か述べた．將來の計畫の一端を述べて結言としう．私の本職は中學校の教師であるが，經營者津田教育財團で，本年から職員の停年制を設け，滿五十五年としたので，學校の方の餘命は三ヶ年間しかない．故にそれ以後は天體望遠鏡をかついで，全國に天文行脚を試み，至るところで天文講演及び天體觀測を行ひ，天文の知識の普及に努めんとするものである．

倉敷天文臺の利用，天文參考館の完備を期し，一生を天文の爲めに盡さんとするものである．　(昭和五年八月二十八日稿)

天文同好會第13回定期總會

總會は，既報の如く，創立滿十年の記念祝賀の催うしと共に，去る十月十八，十九日，兩日賑々しく行はれた．

先づ十八日午後七時，大阪の大每講堂で記念大講演會．之れには大阪支部幹事諸氏の御盡力の賜で，能田理學士の「支那の天文學」，山本會長の「最近の天文談」(幻燈使用)，會衆約300名．

十九日は午後2時より花山天文臺で講演．竹田助教授の「星の距離」，山本會長の「エロスの接近」．それより協議會に移り，諸般の報告承認の後，去九月十三日の評議員會の決議に基づき，會費年額を3圓に値下げすることを滿場一致で可決．次で新役員選擧に移り，拍手裡に山本會長の重任と，水野副會長の新任とを可決．其の後，種々，懇談した．此の日，西は大連と廣島，東は濱松から來會者あり．全くの新レコードであつた．

兩日共，花山では展覽會が開かれ，天文臺から秘藏の天體寫眞ネガ數十枚，それに濱松荒川氏の厚意により，高林氏所藏の時計珍種と，熊本の池田一幸氏より月の寫眞を多く出品せられた．(K)